様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３４３０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2023
課題番号：１７Ｋ０２４７９

研究課題名（和文）幕末維新期における天皇歌壇を中心とする文芸ネットワークの研究

研究課題名（英文）Research on literary networks centred on the Emperor's poetry circles during the Bakumatsu Restoration period.

研究代表者
盛田　帝子（飯倉帝子）（MORITA(IIKURA), Teiko）

京都産業大学・外国語学部・教授

研究者番号：４０５３１７０２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：光格天皇（上皇）が運営する歌壇の実態を調査し、光格の主催する宮廷歌会が、きわめて頻繁に行われていること、光格が和歌指導に非常に熱心であったこと、中宮欣子内親王に対する優遇が目立つこと、光格の主催する宮廷歌会が、楽御会とともにきわめて頻繁に行われており、修学院離宮の御幸でも行われていること、光格が仁孝天皇および廷臣への和歌指導を非常に熱心に行っており、光格の影響は幕末にまで及んでいることを明らかにした。また光格天皇の新内裏への遷幸が同時代の人々にどのように伝播したかということを、本居宣長の言説や『仰瞻鹵簿長歌（ぎょうせんろぼちょうか）』の出版経緯をつぶさに追いながら解析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
光格天皇（上皇）の主催する宮廷歌会が、きわめて頻繁に行われていること、光格天皇（上皇）が和歌指導に非常に熱心であったこと、中宮欣子内親王に対する優遇が目立つことなど、興味深い事実が明らかになった。光格天皇（上皇）時代の宮廷歌会年表を作成するなど、研究がほぼ空白であった幕末維新期の堂上歌壇史研究の基盤を整えたという学術的意義がある。また、天皇・親王の和歌アンソロジーを編み、一般向けに執筆した『天皇・親王の歌』（笠間書院、2019）は、従来一般にはあまり知られていない江戸時代の天皇の歌を広く知らせたという点で社会的意義があった。

研究成果の概要（英文）：I studied the study of the actual situation of the poetry circles run by Emperor Koukaku(the superior),and revealed that court poetry gatherings organized by byukaku were held very frequently,that Koukaku was very enthusiastic in teaching waka,that his preferential treatment of Princess Yoshiko Chugu was conspicuous,that court poetry gatherings organized by Koukaku were held very frequently along with Raku-go-kai, and that these gatherings were also held at the imperial visit to Shugakuin Rikyu,that Koukaku was very enthusiastic in teaching the art of poetry to Emperor Ninkoh and his courtiers,that Koukaku was very enthusiastic in instructing Emperor Ninko and his courtiers in the art of waka, and that Koukaku's influence extended to the end of the Edo period. I also analyzed how Emperor Kotoku's relocation to the new imperial palace propagated to his contemporaries, following closely the discourse of Moto-ori Norinaga and the publication process of“Gyosen robo choka" .

研究分野：日本近世文学・和歌文学

キーワード：近世文学　堂上歌壇　和歌　光格天皇（上皇）　欣子内親王　仁孝天皇　孝明天皇　南殿の桜

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．　研究開始当初の背景

近世歌壇史のうち、中期以降の堂上歌壇については、ほとんど研究が未開拓な状況であったが、報告者（盛田帝子）は『近世雅文壇の研究−光格天皇と賀茂季鷹を中心に』（汲古書院、2013 年）において、堂上地下の交渉を視点とし、光格天皇歌壇を中心に、歌壇の実態解明を進めてきた。2014 年度～16 年度の JSPS 科研基盤研究(C)「近世中後期の光格天皇を中心とする堂上歌壇の実態と文芸ネットワークの研究」（代表者、盛田帝子）では、光格天皇時代の宮廷歌会年表作成をベースに、光格天皇歌壇以後の堂上歌壇の実態を解明し、その意義を明らかにするために、研究を実施し、一定の成果を挙げた。日本近世和歌史研究は、ここ 20 年あまりの間に、資料紹介・調査研究が相次いだ結果、堂上歌壇こそが近世和歌史の中心にあるという和歌史観が定着した。しかし、堂上歌壇の研究は、近世前期に集中しており、近世中後期については現在も手薄であった。一方、漢詩文・演劇等においては、幕末から維新期にかけての展開について捉え直しの機運が高まっていた。前田雅之・青山英正・上原麻由子編『幕末明治』（勉誠出版）は、文学史・思想史・美術史らの論客を糾合し、この時期の動きを見直している。そういう中、幕末・維新期の和歌の展開については、とくに新しい展望がまだ見いだされていなかった。

２．研究の目的

本研究は、2014 年度 2016 年度の JSPS 科研基盤研究（C）「近世中後期の光格天皇を中心とする堂上歌壇の実態と文芸ネットワークの研究」（代表者、盛田帝子）を引き継ぎ、光格天皇歌壇以後の幕末維新期における堂上歌壇の実態を解明しつつ、その文学史的意義を明らかにすることを目的とする。幕末維新期の堂上歌壇の実態は、豊富な資料が存在するにも関わらず、全く明らかにされてこなかった。本研究では、東山御文庫・宮内庁書陵部（旧禁裏・宮家・堂上公家所蔵本）・陽明文庫（近衞家襲蔵本）等の堂上歌壇資料を調査するとともに、当代の和歌をめぐる様々な言説にも留意し、多角的な視点から、近世中後期から幕末維新期の新たな堂上歌壇史の構築を目指す。

３．研究の方法

⑴基本研究の目的達成の基盤となる幕末維新期の堂上和歌・歌壇資料の調査・収集・整理・解読・データ入力を行う。

⑵ 幕末維新期の文学研究者および他分野の研究者を招待して公開研究会を行う。

⑶（１）に基づき、 幕末維新期の宮廷歌壇史年表を作成し公開する。

４．研究成果

⑴基礎データ入力

光格天皇が催した宮廷歌会の実態および譲位後の光格上皇が運営する歌壇や文化的事績を明らかにするための調査を行った。光格天皇主催の御会和歌データについては次のように国立国会図書館所蔵の資料を調査し、御会和歌年表を作成・発表した。

「光格天皇主催御会和歌年表―寛政期編」『大手前大学論集』第 18 号(2018 年 7 月)

「光格天皇主催御会和歌年表― 享和期・文化期編」『大手前大学論集』第 19 号(2019 年 8 月)

「光格上皇主催御会和歌年表－文政期編」(『大手前大学論集』題 20 号、2021 年 3 月)

調査の結果、光格天皇（上皇）の主催する宮廷歌会が楽御会とともに頻繁に行われ、後水尾上皇・霊元上皇以来の多くの廷臣歌人が詠進し、仁孝天皇への指導や女房歌人の育成にも注力したこと、仁孝天皇も光格天皇の事績をひき継ぎ、同等の宮廷歌会を運営したことが明らかになった。

⑵天皇･皇族の和歌と歌壇の実態解明

仁孝天皇・孝明天皇が光格天皇の文化的事績をどのように引きつぎつつ和歌を詠んだかということについて、特に紫宸殿前の南殿の桜の表出の仕方に注目しつつ調査を行った。調査先は宮内庁書陵部・国立国会図書館・国文学研究資料館・陽明文庫であり、宸翰類・歌集・公家日記・御会記録・詠草類などを調査・解読・整理した。また、光格天皇（上皇）の主催する宮廷歌会が、楽御会とともにきわめて頻繁に行われており、修学院離宮の御幸でも行われていること、光格天皇（上皇）が仁孝天皇および廷臣への和歌指導を非常に熱心に行っており、光格上皇の影響は幕末にまで及んでいること、中宮欣子内親王の優遇や女房に対する指導も行っていたことなど、興味深い事実が明らかになった。これらについての研究成果は「光格上皇の文化的行事およびその再興」（日本近世文学会春季大会、2018 年 6 月）および「寛政新造内裏における南殿の桜－光格天皇と皇后欣子内親王」(近世中後期上方文壇における人的交流と文芸生成の 〈場〉公開研究会：大阪大学、2018 年 3 月）として口頭発表を行い、また、飯倉洋一・盛田帝子編『文化史のなかの光格天皇―朝儀復興を支えた文芸ネットワーク―』（勉誠出版、2018 年）に「寛政期新造内裏における南殿の桜―光格天皇と皇后欣子内親王」と題して論文を発表した。また平安時代から幕末まで縷々詠まれてきた宮中の南殿の桜に着目し、霊元天皇、桜町天皇、光格天皇等の和歌を解

読・分析した上で、光格天皇の成し遂げた王朝文化復興を論じた「光格天皇の文化復興ー南殿の桜をめぐってー」(「国語と国文学」東京大学国語国文学会　2020 年 11 月）がある。光格天皇の遺した事績については「大文匣入り尊号一件文書のゆくえ」と題して『雅俗』第 17 号（雅俗の会、2018 年）がある。

後桜町天皇と摂政近衛内前の関係に着目した「後桜町天皇と近衛内前ー朝廷政治と歌道伝受」（『和歌史の中世から近世へ』花鳥社、2020 年 10 月）、光格上皇の添削・合点が施された「カリフォルニア大学バークレー校所蔵 光格上皇御点『実勲詠草』解説と三条西実勲文政期和歌年表」（『国文学研究資料館調査研究報告』41、2021 年 3 月）、幕末まで宮廷の御所伝受に影響を及ぼしていた『後水尾院御抄』の翻刻・解説（『伊勢物語古注釈大成　六』笠間書院、2020 年 12 月）を刊行した。なお、代々御所伝受の保持者を輩出した有栖川宮家伝来の宮内庁書陵部所蔵『御会和歌留』の天保期記録の調査を行い、引き続き光格上皇歌壇・仁孝天皇歌壇の動向を分析した。関連論考として「光格天皇と大阪天満宮」(「大阪天満宮社報　てんまてんじん」76 号、2019 年 7 月）がある。なお、幕末維新から近現代にかけての天皇の和歌および江戸初期から幕末維新期にかけての宮廷歌壇については『天皇・親王の歌』（笠間書院、2019 年 6 月）がある。

⑶天皇・公家の和歌文化の広がり

幕末維新期の天皇・公家の和歌が武家・町人層にどのように受容されていたかという視点からも調査収集を行った。調査先は、宮内庁書陵部・宮内公文書館・陽明文庫・国立国会図書館・国文学研究資料館・ホノルル美術館であり、宸翰類・歌集・公家日記・御会記録・詠草類・絵巻物を調査・解読・整理し、必要なデータ入力を行った。

武家文化中心の江戸と公家文化中心の京での王朝文化復興の比較を念頭においた口頭発表「十八世紀の王朝文化復興ー物合・歌合を通して」（第 23 回大手前比較文化学会、2020 年 11 月）を行った。

また、光格天皇の新内裏への遷幸が同時代の人々にどのように伝播したかということを、本居宣長の言説や『仰瞻鹵簿長歌』の出版経緯をつぶさに追いながら「光格天皇遷幸行列の出版をめぐって」(2020 年度科研基盤研究(B)「近世中後期上方文壇における人的交流と文芸生成の〈場〉」研究会、口頭発表)、「光格天皇と本居宣長－御所伝受と出版メディアをめぐって」(『古典は遺産か？日本文学におけるテクスト遺産の利用と再創造』2021 年 10 月）として発表した。また、仁孝天皇以後幕末維新期まで影響を及ぼした光格天皇の時代の文化や和歌等の制度が、村上天皇の時代の影響を受けていた可能性を示す「光格天皇と源氏物語 －〈文学遺産〉を軸とした江戸時代の政治復興の一例」（EAJS2021)、光格天皇の在位期間の天明期に江戸で流行した堂上派地下歌人の活動の意義を明らかにした「十八世紀の物合復興と『十番虫合絵巻』」(『かがみ』52 号、2022 年 3 月）を発表した。

⑷ワークショップの開催

３月３日には京都産業大学において 18-19 世紀京都文芸生成の現場―みやこに吹く新しい風」と題するするワークショップを主催し、６名の発表者（山本嘉孝・加藤弓枝・盛田帝子・菱岡憲司・中森康之・門脇むつみ）と２名のコメンテーター（大谷俊太・鍛治宏介）が、最新の知見を共有しつつ、京都文壇研究について議論し、今後を展望したが、非常に有意義な議論が出来た。プログラムは次の通り。

『竹堂画譜』と『竹堂画譜二篇』に見る京都の文芸ネットワーク　国文学研究資料館　山本嘉孝
近世中期上方歌壇と小沢蘆庵-頼春水在坂期書簡を中心に-　名古屋市立大学　加藤弓枝
光格天皇の眼差し-京都御所という作品生成の場をめぐって-　京都産業大学 盛田帝子
小津久足と京都　山口県立大学 菱岡憲司
蝶夢の文芸ネットワークを支える力-「まことの情」と死者の魂-　豊橋技術科学大学 中森康之
新趣向の雲中寿老人図―蕪村、呉春、上田耕夫、耕冲の作品をめぐって　大阪大学　門脇むつみ

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計21件（うち査読付論文　11件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 盛田帝子	４．巻 71巻７号
２．論文標題 安永天明期における王朝文化の復興ー古典知の再創造と人的交流－	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本文学	６．最初と最後の頁 24-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 盛田帝子	４．巻 23号
２．論文標題 東都における宮廷文化再興の系譜ー吉宗・宗武から景雄・季鷹・千蔭へ	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本文学研究ジャーナル	６．最初と最後の頁 110-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 盛田帝子	４．巻 261
２．論文標題 光格天皇と本居宣長ー御所伝受と出版メディアをめぐって	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『アジア遊学』（勉誠出版）	６．最初と最後の頁 59-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 盛田帝子	４．巻 52
２．論文標題 十八世紀の物合復興と『十番虫合絵巻』	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『かがみ』（大東急記念文庫）	６．最初と最後の頁 60-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 盛田帝子	4．巻 877
2．論文標題 書評と紹介：青山英正著『幕末明治の社会変容と詩歌』	5．発行年 2021年
3．雑誌名 日本歴史学会編集『日本歴史』（吉川弘文館）	6．最初と最後の頁 101-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 盛田帝子	4．巻 1
2．論文標題 上賀茂山本家所蔵賀茂季鷹関係資料解題	5．発行年 2022年
3．雑誌名 『近世中後期上方文壇における人的交流と文芸生成の〈場〉』（大阪大学文学研究科）	6．最初と最後の頁 34-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 盛田帝子	4．巻 97-11
2．論文標題 光格天皇の文化復興ー南殿の桜をめぐってー	5．発行年 2020年
3．雑誌名 国語と国文学	6．最初と最後の頁 16-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 盛田帝子	4．巻 －
2．論文標題 後桜町天皇と近衛内前ー朝廷政治と歌道伝受	5．発行年 2020年
3．雑誌名 和歌史の中世から近世へ	6．最初と最後の頁 467-488
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 盛田帝子	4．巻 20
2．論文標題 光格上皇主催御会和歌年表－文政期編	5．発行年 2021年
3．雑誌名 大手前大学論集	6．最初と最後の頁 259-329
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 盛田帝子	4．巻 41
2．論文標題 カリフォルニア大学バークレー校所蔵 光格上皇御点『実勲詠草』解説と三条西実勲文政期和歌年表	5．発行年 2021年
3．雑誌名 国文学研究資料館調査研究報告	6．最初と最後の頁 151-176
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 盛田帝子	4．巻 22
2．論文標題 十八世紀の王朝文化復興―物合・歌合を通して	5．発行年 2021年
3．雑誌名 大手前 比較文化学会 会報	6．最初と最後の頁 15-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 盛田帝子	4．巻 19
2．論文標題 光格天皇主催御会和歌年表―享和期・文化期編	5．発行年 2019年
3．雑誌名 大手前大学論集	6．最初と最後の頁 127-178
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 盛田帝子	4．巻 76
2．論文標題 光格天皇と大阪天満宮	5．発行年 2019年
3．雑誌名 大阪天満宮社報　てんまてんじん	6．最初と最後の頁 8-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 盛田帝子	4．巻 17号
2．論文標題 大文匣入り尊号一件文書のゆくえ	5．発行年 2018年
3．雑誌名 雅俗	6．最初と最後の頁 139-140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 盛田帝子	4．巻 18号
2．論文標題 光格天皇主催御会和歌年表―寛政期編	5．発行年 2018年
3．雑誌名 大手前大学論集	6．最初と最後の頁 61-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 盛田帝子	4．巻 なし
2．論文標題 寛政期新造内裏における南殿の桜	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『文化史のなかの光格天皇』	6．最初と最後の頁 287-311
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 盛田帝子	4．巻 14号
2．論文標題 カリフォルニア大学バークレー校所蔵光格天皇勅点高松公祐詠草	5．発行年 2017年
3．雑誌名 上方文藝研究	6．最初と最後の頁 15-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 盛田帝子	4．巻 106号
2．論文標題 家集を出版すること―賀茂季鷹『雲錦翁家集』を巡って	5．発行年 2017年
3．雑誌名 近世文藝	6．最初と最後の頁 29-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 盛田帝子	4．巻 なし
2．論文標題 歌語「のどけし」にみる近世の歌論と実作	5．発行年 2017年
3．雑誌名 『古典文学の常識を疑う』	6．最初と最後の頁 168-171
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 盛田帝子	4．巻 1424
2．論文標題 近世の晴の歌	5．発行年 2017年
3．雑誌名 心の花	6．最初と最後の頁 34-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 盛田帝子	４．巻 18
２．論文標題 光格天皇主催御会和歌年表―寛政期編	５．発行年 2018年
３．雑誌名 大手前大学論集	６．最初と最後の頁 121-177
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　2件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 盛田帝子
２．発表標題 賀茂季鷹と王朝文化復興
３．学会等名 第一回 賀茂社家古典籍セミナー（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 盛田帝子
２．発表標題 光格天皇と女性歌人
３．学会等名 日本近世文学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 盛田帝子
２．発表標題 光格天皇遷幸行列の出版をめぐって
３．学会等名 2020年度科研基盤研究（B）「近世中後期上方文壇における人的交流と文芸生成の〈場〉」研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 盛田帝子
２．発表標題 光格天皇と源氏物語 ー〈文学遺産〉を軸とした江戸時代の政治復興の一例
３．学会等名 ヨーロッパ日本研究協会（European Association of Japanese Studies） 2021年 国際会議（国際学会）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 盛田帝子
２．発表標題 平安朝内裏の復興と本居宣長の長歌
３．学会等名 早稲田大学国際日本学拠点 早稲田大学総合人文科学研究センター 角田柳作記念国際日本学研究所 オンライン・ワークショップ『テクスト遺産の利用と再創造 日本古典文学における 所有性、作者性、真正性』（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 盛田帝子
２．発表標題 本居宣長記念館所蔵『妙法院宮真仁法親王御懐紙』をめぐって
３．学会等名 2020年度科研基盤研究（B）「近世中後期上方文壇における人的交流と文芸生成の〈場〉」公開研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 盛田帝子
２．発表標題 ホノルル美術館所蔵『十番虫合絵巻』をめぐって
３．学会等名 主催 絵入本学会・実践女子大学文芸資料研究所・大阪大学文学研究科 協賛 国文学研究資料館・公益財団法人東洋文庫・一般社団法人美術フォーラム21刊行会・フランス国立極東学院「絵入本ワークショップ12」
４．発表年 2020年

１．発表者名 盛田帝子
２．発表標題 十八世紀の王朝文化復興ー物合・歌合を通して
３．学会等名 第23回大手前比較文化学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 盛田帝子
２．発表標題 天皇の和歌空間―南殿の桜をめぐって
３．学会等名 科研研究会「近世中後期上方文壇における人的交流と文芸生成の〈場〉」
４．発表年 2019年

１．発表者名 盛田帝子
２．発表標題 光格上皇の文化的行事およびその再興
３．学会等名 日本近世文学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 盛田帝子
２．発表標題 寛政新造内裏における南殿の桜―光格天皇と皇后欣子内親王
３．学会等名 「近世中後期上方文壇における人的交流と文芸生成の〈場〉」公開研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 盛田帝子
２．発表標題 近衛基前と宮廷歌会―光格天皇および皇后欣子内親王との関わりを通して
３．学会等名 第26回陽明文庫古典資料研究会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計3件

１．著者名 片桐 洋一、山本 登朗、大谷 俊太、盛田 帝子	４．発行年 2020年
２．出版社 笠間書院	５．総ページ数 254
３．書名 伊勢物語古注釈大成 6	

１．著者名 盛田帝子	４．発行年 2019年
２．出版社 笠間書院	５．総ページ数 122
３．書名 天皇・親王の歌　和歌という形でつづる天皇のことば	

１．著者名 飯倉洋一・盛田帝子(共編)	４．発行年 2018年
２．出版社 勉誠出版	５．総ページ数 408
３．書名 文化史のなかの光格天皇 朝儀復興を支えた文芸ネットワーク	

〔産業財産権〕

〔その他〕

大手前大学　研究者業績検索システム http://www.otemae.ac.jp/professor/detail/5004

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関